

れ だ ん や ま も の が た り
レダンの山の物語



か ひと しっぴつしゃ ひやまじゅん こ
書いた人／執筆者：檜山 純子

ひと しっぴつきょうりよくしゃ なかごしな おみ
てつだってくれた人／執筆協力者：中越尚美

いらすと あいな ひやま ざずり
イラスト：アイナ・ヒヤマ・ザズリ

れ だ ん さ ん ま れ し あ
レダン山はマレーシアの
じ ょ ほ る し ゅ う
ジョホール州にあります。

た か せ ん に ひ ゃ く な な じ ゅ う ろ く め
高さは1276メー

と る き は な
トルです。めずらしい木や花

お お た き
が多く、きれいな滝もあります。

む か し む か し れ だ ん さ ん ひ め さ ま ま
昔々、レダン山にとてもきれいなお姫様が、魔
ほう つか す
法使いのおばあさんといっしょに住んでいました。

く に ま ら っ か ま ふ む ど お う さ ま
となりの国マラッカにマフムドという王様がいま

ま ふ む ど お う れ だ ん や ま ひ め さ ま
した。このマフムド王は、レダンの山のお姫様と

け っ こ ん お も ま ら っ か お う さ ま
結婚したいと思いました。マラッカには王様のため

は た ら け ら い お う さ ま け ら い
に働く家来たちがたくさんいました。王様は家来

い
に言いました。



れ だ ん やま ひめさま あ い
「レダンの山のお姫様に会いに行くのだ！そして、

おうさま けっこん い
『王様と結婚してください』と言うのだ！」

おうさま ばんめ おく こ
王様にはもう 1番目の奥さんと子どもがいました。

い す ら む きょう にん おく
でも、イスラム教では4人まで奥さんをもらうこと

ができます。れ だ ん やま ひめさま ばんめ おく
レダンの山のお姫様に2番目の奥さん

になってもらはうのは 難 しい仕事ですから、誰も

れ だ ん さ ん い
レダン山まで行きたがりませんでした。

おうさま まらっか いちばんえら けらい はんとあ
王様は、マラッカで一番偉い家来のハントアに

い
言いました。

れ だ ん さ ん い ひめさま あ
「レダン山に行って、お姫様に会うのだ！」

はんとあ げんき
ハントアは、あまり元気ではありませんでしたが、

「はい、かしこまりました、王様！」と言いました。



はんとあほか けらい れだんさん い
ハントアと他の家来たちはレダン山へ行きました。

やま くさ き かわ おお いし
山には草や木がたくさんあり、川や、大きな石もありました。動物もたくさんいましたから大変でしたが、村に着きました。

れだんさん ひめさま むらびと
「レダン山のお姫様はどこですか。」と村人にききました。村人たちは

わ わたし ひめさま うち し
「分かりません。私たちはお姫様の家を知りません。お姫様は不思議な人です。」と言いました。

はんとあ つか けらい ひとり
ハントアはとても疲れましたから、家来の一人、ままと わたし むら やす れだん やま ひめ
ママトに「私は村で休みます。レダンの山のお姫様に会って来てください。」と言いました。



ままとほかけらいれだんさん のぼ
ママトと他の家来たちはレダン山を登りました。

やまのぼたいへん ひめさまうちつ
山登りは大変でしたが、お姫様の家に着きました。

ひめさまうちふしぎはしらおお
お姫様の家は、とても不思議でした。柱は大きな
ほね
骨でできていました。そして、屋根はとても長い髪
やねながかみ
でできていました。

うちなかまほうつか
家の中から魔法使いのおばあさんが出てきました。

「どなたですか。」

わたし まらっか まふむどおう けらい おうさま
「私はマラッカのマフムド王の家来です。王様は

れだん やま ひめさま けっこん い
『レダンの山のお姫様と結婚したい』と言っています。」とママトは言いました。おばあさんは、

わ ひめさま い
「分かりました。お姫様にききます。」と言って、
うち はい
家へ入りました。しばらくして、おばあさんは家
なか で い
の中から出てきて言いました。



ひめさま なな もの ほ い なな
「お姫様は七つの物が欲しいと言っています。七
もの ひめさま おうさま
つの物をください。そうすれば、お姫様は王様と
けっこん ひと め か しんぞう おおざらななさら
結婚します。1つ目は蚊の心臓を大皿七皿です。
ふた め のみ しんぞう おおざらななさら みつ め
2つ目は蚤の心臓を大皿七皿です。3つ目はまだ
み みどりいろ かた びんろう じゅ す ななはい
実が緑色で固いビンロウのジュースをかめ七杯で
よつ め おんな こ なみだ ななはい いつ
す。4つ目は女の子の涙をかめ七杯です。5つ
め まらっか れだんさん きん はし
目はマラッカからレダン山までの金の橋です。そし
むつ め れだんさん まらっか ぎん はし
て、6つ目はレダン山からマラッカまでの銀の橋で
なな め あと おし
す。7つ目は後で教えます。」

ままと やま くだ ほん と あ あ
ママトは山を下り、ハントアに会いました。そ
ひめさま ほ い はん
して、お姫様の欲しいものを言いました。ハン
と あ い
トアはしずかにききました。そして、言いました。



「そうですか。お姫様のお願いはとても難しいお
願いです。私はもうあまり元気じゃありませんか
ら、王様を助けることができません。王様に『あき
らめてください』と言ってください。私はもう
王様に会うことができません。」

ハントアはとても悲しかったのです。そして、滝
の中に消えてしまいました。

ハントア以外のママトたち家来は、王様のところ
に帰りました。そして、お姫様の欲しい物とハント
アのことばを王様に言いました。



おうさま おどろ かんが
王様は驚きました。そして、しばらく考えまし
か のみ びんろう なみだ あつ
た。蚊、蚤、ビンロウ、涙を集めることはできま
まらっか れだんさん きん ぎん
す。しかし、マラッカからレダン山までの金と銀の
はし たいへん かね ひと ちから
橋をつくるのは、とても大変です。お金と人の力
じかん はんとあ
と時間がたくさんかかります。ハントアももういま
おうさま ひめさま けっこん
せん。でも王様はお姫様と結婚したかったので、あ
はし
きらめませんでした。そして、橋をつくることを決
き
めました。

か のみ びんろう なみだ あつ はし
蚊、蚤、ビンロウ、涙を集め、橋もできました。
けらい はし わた ひめさま あ い
家来たちは橋を渡って、お姫様に会いに行きました。
ひめさま はし み
「お姫様、橋を見てください。とてもきれいです。
おうさま けっこん
さあ、王様と結婚してください。」



ひめさま い
お姫様は言いました。

「ありがとう。とてもきれいですが、^{わたし}私^はもうひとつ、^ほ欲しい^{もの}物^があります。それは、^{おうさま}王^{さま}様の^{むすこ}息子^{さん}さんの^ち血^{ちやわん}を^{いっぱい}茶碗^{一杯}です。息子^{さん}の^{むすこ}右^{みぎ}の^{うで}腕^きを切^{って}ください。」

^{けらい}家^ま来^らたちは^まマ^らツカ^かに^{かえ}帰^りました。そして、お

^{ひめさま}姫^{ねが}様^{おうさま}のお願^いいを^い王^い様^いに^い言^いま^した。

^{おうさま}王^{おどろ}様^{なが}はと^{あいだ}と^{なに}も^な驚^なき^なま^した。そして、^{なが}長^{あいだ}い^{なに}間^な、^い何^いも^い言^いま^しせ^んで^した。でも、^{おうさま}王^{ひめさま}様^{ぜったい}は^ぜお^ぜ姫^ぜ様^{たい}と^ぜ絶^{たい}対^{たい}に^ぜ結^{たい}婚^{たい}し^たか^った^ので、^{むすこ}息^{みぎ}子^{うで}の^き右^きの^き腕^きを^き切^らう^{おも}と思^いま^した。



その晩、王様は息子の部屋へ行きました。かわいい息子はよく寝ています。王様は刀を振り上げました。でも、振り下ろすことができません。

「えいっ、もう一度。」

すると、突然、光の中にきれいな女の人が出てきました。

「王様、やめてください！ 私はレダンの山の姫です。あなたは息子さんの腕を切るのですか。とても悪い人です。私はあなたと結婚しません。」

レダンの山のお姫様は強い声で言いました。



そして、お姫様は突然消えました。同じ時、金の
橋も銀の橋も消えました。王様も、家来たちもとて
も驚きました。そして、みんな悲しくなりました。
その後、誰もレダンの山のお姫様を見ていません。
お姫様はどこへ行ったのでしょうか。
さて、それから何百年も経ちました。でも今、
不思議なことがあります。レダン山で、あの魔法使
いのおばあさんを見る人がいるそうです。

